

---

# 僕のカモネギが強すぎる件について

カマボコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕のカモネギが強すぎる件について

### 【Nコード】

N2442BA

### 【作者名】

カマボコ

### 【あらすじ】

最強のカモネギを手に入ってしまった主人公は何故か望んでもいないのにエリートトレーナーになってしまう。そんな変わったお話を。

基本、戦闘はアニメ基準ですのでゲームとは異なったものになります。

出だしからやばい件について(前書き)

勢いだけで書きました感があるのは気のせいです。

## 出だしからやばい件について

十二歳の誕生日、両親に旅に出ると言われた。突然過ぎて驚きが隠せないままの僕に両手で抱える程の大きさの卵を渡された。すると卵が動き出し、ピキピキとヒビが入り、パツカリと開いた。

中から元気よく飛び出してきたそれは『カモネギ』だった。

カモネギは赤帽子の髭おやじのようなジャンプで、体操選手顔負けの回転をしたと思えば華麗に着地。この間、四秒。カモネギは決め顔でこつちを見てドヤドヤと伺っている。僕が凄く凄いと拍手とセットで褒めるとふっ、とクールな素振りのご対応。

何だこれ……

まさにその言葉がこの状況に適していたと思う。そして僕の引き攣った顔に止めを刺すかの如く、いつものヘラヘラした顔の父が真剣な顔で、

「先祖代々受け継がれてきた家宝だ。持ってけ！」

と、『金色のネギ』を渡された。

思わずそのネギで父の頭をぶつ叩いた僕は悪くないだろう。

軽く半泣きの父は無駄に長い武勇伝を語った。

それは父が昔、カントーのチャンピオンになった話だった。それは凄い事だと思ったがさらに凄い事に、『カモネギ一匹』だけで殿堂入りしたそうだ。

冗談だろ？　　と思い、ありえないと言ったらチャンピオンの証である賞状を見せ付けられた。オマケにカモネギとのツーショットも。ここまで見せられた以上、信じる他なかった。

それから自分からチャンピオンを辞退して公式ジャッジになった話や、母との出会いなどを語ってくれた。

そして母もカモネギ使いだった。昔はライバル同士だったそう。それが友情になり、愛情になり、結婚したのだと。

今では仲のいいカモ……いや、オシドリ夫婦だ。

そんな両親のカモネギもオスとメスだった事もあり、夫婦になった。こうして生まれたのがさっきのカモネギなのだった。

えらく纏まった話につきこむ間もなく、旅の支度を父がしていた事に驚く余裕も無かった。

何だこれ……

「じゃあ、行ってくるよ」

僕がそう言つと母は泣きながら手を振る。大袈裟だな、と思いながらも自分を思ってくれている母に感謝しながら旅へ……

行こうとしたら父に止められた。空気を読んでくれとモヤモヤしたまま耳を傾ける。

『ついでにこれを持っていけ!』

と言われて渡されたのが……正式名称がわからない……

簡易なヘッドフォンのような形状だった。よく見ると、マイクが付いてある。それが二つあった。何だろうと思い、父に聞いてみる。すると父は、

『インカムと言って、ポケモンと会話出来る物だ。まあ、オマケのような物だよ』

こっちの方がすげえじゃねえか! と父をぶん殴ってしまった僕は悪くないだろう。

取りあえず、自分の住んでいた町の隅っこまで来た。後は真っ直ぐ行くだけ。そしたら初めて旅に出る事になるのだ。

そしてまず、僕にはやらなければならない事がある。

そう、このインカムとやらだ。

はたしてこのインカムを使えばポケモンと話す事が出来るのだ

ろうか。唯のドッキリで嘘なんじゃないだろうか。

信頼性の欠ける行動だった為かいまいち信用できない。だが、何事もチャレンジだ。物は試しても言うし。

僕はパートナーであるカモネギにインカムを付け、自分にも付けてみた。何言おうかな？ とりあえず無難なところで……

「今日からパートナーになったランだ。よろしく」

味気無い無難な台詞で試してみた。どう返してくるか楽しみだ。カモネギのクチバシがゆつくりと開き話す。

『ああ、よろしく頼むぞ相棒』

まさかの本物！？ まあ、父は嘘ついた事無かったしな……

… それでも少し疑わざる負えなかったのだ。だってねえ……

まあ、とりあえず、今わかった事はこの機具は本物で、カモネギはメスだった事だ。

何故メスだとわかるのかと言うと、事前に母から聞いていたのもあるが、今の声で確実なものだとわかった。

カモネギはハスキーボイスでクールでカッコイイ女の人のような言動だったからだ。

姐御とで呼べばいいのだろうか？ そこんとこ悩む。

『何を悩んでるんだラン、冒険の旅に行こうじゃないか』

独特のかつこよさを見せ付け、僕を急かす力モネギ。急かす…  
…？

「……………そんなにこの町から出たいのか？」

疑問を口に出してみた。

『な、何を言うんだ？ 私としては親元を離れなこればいけないんだぞ？ これは生後二時間にも満たない私には不幸な事であつて……………』 「じゃあ、戻ろうか？」 『私の負けだよ……………』

ペタンと仰向けになつて服従のポーズをとるカモネギ。ちゃんと金色のネギも足元に置いてある所完璧である。

それは犬がするものじゃないのか？ といった野暮な疑問は口にしない。言ったらそれはそれは悲しい旅のスタートになつてしまつてあるう。なのでお口はミッフィー。

まあ、理由を聞こう。

「どうして町にいたくないんだ？」

『それが……………』

『……………といった具合で……………』



「カモネギ、お前もか……」

話をまとめよう。

実は、僕が卵を貰う少し前に、産まれていたそう。まあ、あんなタイミングよく産まれる訳ないしね。第一、産まれて直ぐに空中三回転を出来るつわものはそうそういないだろう。

じゃあ何故、外に出なかったのかと尋ねたら、血相変えて、

『私の母親と父親との会話で我が子への期待がとんでもないものだった……』

と羽根を震わせながら語ってくれた。

まさかここまで偶然と言うものは起こるのだろうか。

僕の両親もカモネギの両親と同じ、『親馬鹿』だった。

だからカモネギの話は自分が体験したかのようにわかるのだ。

「カモネギ……僕の両親も……」

最後まで言わずともカモネギは理解してくれた。

『そうか……ランもだったか……』

「ああ、そうさカモネギ。僕達は似た者……いや、似た動物通しだったんだ」

『「これからよろしく頼む相棒！！」』  
絆が深まった瞬間だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2442ba/>

---

僕のカモネギが強すぎる件について

2012年1月6日08時50分発行